



ヒグマ



クロテン



エゾシカ



シマリスの幼獣



エゾモモンガの幼獣



若いナキウサギ



オオタカの成鳥



クマタカの若鳥



飛翔するタンチョウ

とがちの野生動物

Wildlife in Tokachi

2025



国立大学法人 北海道国立大学機構 帯広畜産大学
野生生物保全管理技術養成事業



ヒグマとエゾシカ

Brown Bears & Sika Deer



ヒグマ

最も新しい情報(2024年3月)による北海道のヒグマの推定個体数は12,220頭で、北海道の定めるヒグマ管理計画(第2期)改定案では、2025～2034年の10年間で13,290頭を捕獲し、個体数を7,980頭まで減らすことを目標にしています。2023年度の北海道全体での捕獲数は1,804頭、十勝管内は185頭で、十勝管内はオホーツク管内、上川管内に次いで3番目に多い地域です。全道、十勝管内とも記録の残る1962年以降で過去最多の捕獲数で、個体数の増加とドングリの不作が原因であると考えられています。

北海道が2024年度に行った意識調査では、ヒグマに対して「捕獲して減らすべき」という意見が「どちらかという」とも含めて59.0%で最も多くを占めていましたが、「できるだけ殺さずに対応すべき」という意見も26.5%ありました。



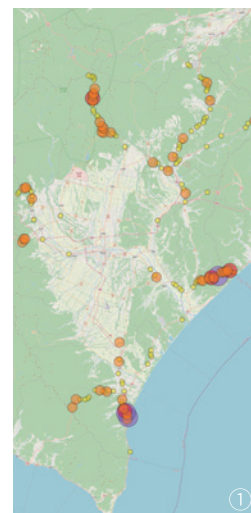
三国峠に出現したヒグマ

エゾシカ

北海道全域のエゾシカの推定個体数は2023年度で73万頭、同年の捕獲数は15万頭、2024年度の目標捕獲数は18万5000頭です。帯広市ではシカの年間捕獲目標を600頭と定めています。十勝管内の農業被害額は全道の被害額の約10%で、釧路管内、上川管内、オホーツク管内に次いで全道で4番目に多い金額です。十勝管内の被害額はここ数年増加傾向にあり、2022年度は4億7000万円、2023年度は5億2500万円で、足寄町は被害額が1億円を超えています。

エゾシカはロードキル(交通事故)の件数も全道的に増加しており、北海道警察がまとめた2024年10月末現在の十勝管内ロードキル(人身と物損)件数は348件、例年10～12月にかけて事故が多発しています。2023年度、北海道全域での事故数は5,287件で、十勝管内では足寄町72件、広尾町51件、浦幌町と新得町も30件以上の事故が発生しています。

帯広畜産大学では、ロードキル防止のためのステッカーを作成し、事故を減らすための啓蒙活動を行っています。



①



③

①十勝管内国道のロードキル多発地点のマップ。
※2014～2023年の10年間の集計
※小さな丸: 5-10件 一番大きな丸: 30件以上

②道路に出てきた3頭の雄ジカ

③帯広畜産大学で作成したロードキル防止ステッカー



②

キタキツネ・エゾタヌキ・クロテン

Red Foxes, Raccoon Dogs & Sables

キタキツネとエゾタヌキ

両種とも個体数の少なくない普通種で、市街地や農耕地では有害獣として駆除される立場にあります。特にキツネは人獣共通感染症であるエキノкокスの媒介者であり、また農耕地ではスイートコーンなどを食害する害獣であるため、帯広市でも年間の捕獲目標を400頭とにおいて、実際に毎年200～250頭が捕獲されています。十勝管内全域では、2022年度に狩猟と有害鳥獣駆除を合わせて、キタキツネ2,313頭、エゾタヌキ221頭が捕獲されています。ちなみにこの年のアライグマの捕獲数は1,075頭でした。また両種ともロードキルに遭う事が多い動物で、特に十勝管内では2015年以降、両種のロードキルが急増しています。これはこの年までに疥癬(かいせん)の流行が収束し、個体数が増加してきたことが一因であると考えられます。普通種であるためにロードキルに対する積極的な対策はほとんど取られていませんが、両種ともオーバースやトンネル状のカルバートなどの人工的な道路横断施設をよく利用します。

最近、十勝では黒い毛色のキタキツネや珍しいエゾタヌキの白変種(アルビノではない)も確認されています。



ジュウジギツネと呼ばれる黒い毛が混じったキタキツネ



エゾタヌキの珍しい白変種

クロテン

北海道のクロテンは「黒」テンではなく、淡い褐色の毛色です。そのため十勝管内では黒色のミンクがしばしばクロテンと間違われて報告されます。毛皮は大陸産のクロテンと同様に上質のため、明治以降乱獲されましたが、1920(大正9)年に狩猟が禁止され、以降100年以上保護されています。最近個体数が増えているようで、帯広畜産大学や帯広農業高校の構内、緑ヶ丘公園や、十勝川と札内川の合流点である相生・中島地区でもときどき目撃されています。

エゾリスやエゾモモンガなどの樹上性動物にとってクロテンは恐ろしい捕食者なので、クロテンの市街地への進出は小動物にとっては新たな脅威になるでしょう。アイヌの言葉では「カスペキラ」と呼ばれますが、これは「しゃもじを持って逃げる」の意味で、確かに人を恐れず人家に入ってくることがあり、この写真の個体も人家に入ってきてスマートフォンで撮影されたものです。



人家に入り込んだ人を恐れないクロテン

リス類・ナキウサギ

Squirrels & Pikas



エゾリス・シマリス・エゾモモンガ

十勝管内の森林には3種類のリス科動物が生息しています。このうちエゾリスは針葉樹林や針広混交林を好み、シマリスはカシワやミズナラなどの広葉樹林を好みます。エゾモモンガは針葉樹・広葉樹どのタイプの林にも住むことができます。帯広市街地の公園緑地や学校・寺社などの緑地にもエゾリスやエゾモモンガの生息する場所は多くありますが、シマリスはカシワ林の消失と共に生息する場所が少なくなってきました。帯広畜産大学の構内にも昭和の時代までは3種類のリス科動物が生息していましたが、平成以降になってシマリスが姿を消し、今はエゾリスとエゾモモンガだけになってしまいました。

これらのリス類は使う空間や時間、餌資源を使い分けており、昼行性のエゾリスがマツ類やクルミの種子を餌として樹上と地面で活動し、昼行性で冬眠もするシマリスがドングリや草などの種子、昆虫などを食べ地面と地下で活動し、夜行性のエゾモモンガは葉や芽が主な餌で樹上で活動するなど、同じ森林で共に生きることができます。



餌の昆虫を食べるシマリス



餌を食べている冬毛のエゾモモンガ

ナキウサギ

氷河期の生き残りと呼ばれるナキウサギは冷涼な気候を好み、十勝管内では東大雪山系と日高山脈が主な生息地です。近年、温暖化の影響などにより特に低標高域で小規模な生息地の消失が顕著になっています。ナキウサギは暑さに弱く、気温が20度を超えると活動性が落ちます。現在生息の確認できなくなった足寄町の例では、2023年7～8月の平均気温が20年前と比べて6.4度上昇して23.4度になっていました。また、東ヌプカウシヌプリなど、ナキウサギの生息地へのアプローチが比較的簡単な場所にはカメラマンが集中し、食草の踏み付けなどによる生息地の荒廃が問題となっています。



ロングコールと呼ばれる連続音を発する雄のナキウサギ



クマタカ

イヌワシのいない十勝地方では森林性猛禽類の頂点に立つ大型の鳥類で、大雪山系、日高山脈、白糠丘陵などで繁殖しています。大型の鳥類でありながら、幅広く比較的短い翼を持つことで障害物の多い森林内を飛ぶことに長けています。また、樹洞に足を突っ込んで中のモモンガを狩ることもあります。最近では、帯広市街地でも、渡りの時期に時々確認されるようになりました。

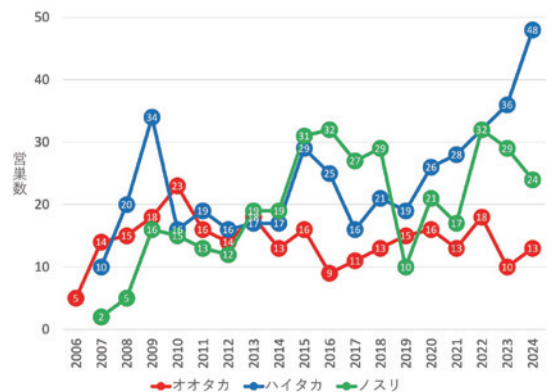
表紙の写真の若鳥は帯広市の中心街のビルにぶつかって保護された個体で、左目が少しおかしいのは、恐らくそちら側からぶつかって腫れているからです。ちなみに漢字では「熊鷹」と書きますが、「角鷹」と書くこともあります。



クマタカの成鳥

オオタカ・ハイタカ・ノスリ

これら3種類の中・小型のタカ類は、十勝平野の農業地帯に植栽された防風林や孤立林などの人工林で営巣しています。近年の繁殖数の推移を見ると、オオタカの営巣数はハイタカやノスリに比べて少ないのですが、変動は少なくほぼ安定しています。ハイタカは比較的大きな増減を繰り返し、特に最近では急激に増加しています。ノスリはオオタカよりも営巣数が多く、一時的な減少はありましたが、ほぼ安定しています。体のサイズがほぼ同じオオタカとノスリは巣をめぐる競合がありますが、体のサイズの小さなハイタカは捕食者となるオオタカを避けて、オオタカの入りにくい樹木の密度が高い林で営巣しています。



十勝管内におけるタカ類営巣数の推移



オオタカ



ハイタカ



ノスリ



水辺の鳥

Water Fowls & Sea Eagles

オジロワシとタンチョウ

タンチョウは特別天然記念物、オジロワシは天然記念物で希少な鳥類ですが、両種とも十勝管内では個体数が増加しています。環境省のレッドデータではタンチョウもオジロワシも同じ絶滅危惧II類(VU)ですが、オジロワシは1ランク下がったVUであり、タンチョウもよりランクを下げようという議論があります。ただし、両者とも高病原性鳥インフルエンザで死亡した例が報告されており、特に餌付けにより集団で越冬するタンチョウには大量死の恐れがあるため注意が必要です。

増えた個体による農業や水産業への被害、生態系の他の種類に与える影響がある一方で、観光資源としての有効利用や自然再生、ネイチャーポジティブ事業のシンボルとしての立ち位置もあり、これらの貴重な鳥類との共存のあり方を今後とも考えていかなければなりません。

オジロワシのペア



親の翼の下から顔を出したタンチョウのヒナ

公園のカモ

帯広市街地の中心部にある緑ヶ丘公園の池のカモ類はこれまではマガモとカルガモが中心でしたが、最近はオシドリも繁殖しています。これらの3種類のほか、一年を通じては、ハシビロガモ、コガモ、ヨシガモ、オナガガモ、ヒドリガモ、キンクロハジロ、カワアイサなど10種類ほどが観察されています。またこれらのカモ類やそのヒナをねらってやってくるオオタカやハイタカなどの猛禽類も観察されています。



子沢山なオシダリの母親とヒナたち

リーフレット作成協力、資料および写真提供(五十音順)

アークコーポレーション株式会社、浅利裕伸、池山慧、大熊勲、大町哲也、貞野真生、佐藤周平、佐藤尚道、塩原真、高橋良江、平井克玄、広沢圭司、松本朋華、柳川久(文責)

* 本冊子は「帯広畜産大学 野生生物安全管理技術養成事業」の一環として作成されました。

事業について詳しくはこちら <https://www.obihiro.ac.jp/biodiversity>



発行日 2025年1月1日